

書評

『北海道野菜産地発展の軌跡』

編集…北海道野菜史研究会

発行…北海道協同組合通信社

北海道大学名誉教授
北海道地域農業研究所顧問
七戸 長生



このたび北海道の野菜産地の歴史を辿る大著が刊行された。野菜と一口で言っても、その種類はピンからキリまで、多種多様である。それを全く網羅的に、しかも克明に取り上げた全ページ六一〇頁を越す大作である。

まずはこの著作の、長期にわたる企画、取材、研究・検討、編集、そして刊行を担当された「野菜史研究会」の方々に、心

からの祝意と敬意を捧げる次第である。

一読して気付くことは、個々の野菜を生産する現地の実情に即して、極めて克明に「産地形成」の経緯が明らかにされている。それがどのようにして日本に渡来し、北海道に持ち込まれたか、それがどのような人達の手で試作され、市場に出され、どのような評価を得てその販路が、全国各地、さらには海外への輸出にまで拡大されていったか、ということが、まるでパノラマを見るように示されている。一口で言えば、北海道の野菜産地の「百科全書」ということになる。

だが、より重要なことは、試作の段階から次第に仲間が増えていく中で直面した数々の難問を、勇敢な先駆者達がどのように捉え、どのように打開していったか、この肝腎の部分で、それぞれの産地について克明、かつ的確に記述していることである。これは巧まずして、これから新しく「産地形成」に挑戦しようとしている人達への絶好の、実践的な「手引き書」となっている。

さらに特記すべきことは、膨大な原稿として集積された研究会の成果の公刊に当って直面した、窮屈な出版事情の打開のために、「予約購読」という活路を拓き、これに対する各方面からの多大な協力を得て、見事、成功裡に事業が進められたという、「刊行会」の活躍ぶりを逸することができない。この一事を以ってしても、本書の刊行に関与された関係者の並々ならぬ熱意がうかがわれる。

さて、中味に入っていくと、本書は三部構成になっていて、

第一部は産地発展を支えた人と技術、第二部は野菜の物流がいかに展開したか、そして第三部は野菜生産のための新技術の開発と活用、となっている。しかし、いかにして新しい「産地」を作り、発展させていくかという問題関心に重点を置く本書では、圧倒的に第一部に紙幅が当てられている。

なにしろ野菜一九品目（これに普通畑作物である馬鈴薯が加わっているから二〇品目）一二産地事例を逐一読んでいくと、まさに千差萬別、多種多様な「足どり」に、そのエッセンスをどう整理したらよいか、いささか戸惑うが、「産地形成」と「発展軌道」というように達観してとらえると次のようになる。その最初のキッカケは必ずしも特定の事柄に限らない。品質・食味などの優れた新品種の発見・試作。従来の作期を大幅に促進したり、遅れさせたりして、予想外の時期に市場に出す。遠く隔れた市場への出荷方法、運送方法の転換。中には、栽培のための重労働を軽減するための機械の開発とか、作業方法の画期的な変更。ここには生産資材の画期的な工夫によって実用新案のпатентを取ったようなケースも含まれる。

こういつた成功体験をつきつめていくと、五つか六つの頂点から始まって、次には別の頂点、さらに次には別の頂点へという具合に、試作グループの活動の焦点が展開しながら、結果として「産地形成」が進み、やがては販売額が億単位のピークへと駆け登っていく。まさに一巻のドラマを見る思いがする。

改めて、この頂点を要約すると、①数多くの勇氣ある試作者の結集。②これを支えた心ある種苗業者の活動。③人々の二-

ズを反映し予見した市場の評価・情報。④これらの情報をもとに果敢に技術の改良・開発に取り組んだ栽培技術の研究者。⑤これらをベースに生産者の組織化に活力を与えた青年部会。⑥流行に敏感で軽やかに流動する消費者達。

誤解を恐れずに、著名な産地をあてはめて列挙すれば、平取のトマトや夕張のメロンは品種から始まった。豊浦のイチゴや仁木の銀嶺イチゴは作期の選択。しかし次にマークされた頂点は、それぞれの産地によって一様ではない。ところが、五年、一〇年という経過の中で、それぞれの産地は独自のコースを辿りながらも、上述の六つの頂点を巡り巡って発展しているようにみえる。

このように読み進んでくると、本書は一見「百科全書」のように見えながらも、その内実は実際に「産地形成」のために汗を流している人々のための、実例豊富なガイドブックになっている。ところが、本書の「予約購読」の推進に尽力された富田さんが「実は肝腎の野菜産地の指導者、生産グループの人達の反応が予想外に低調で、ガッカリした」ことを筆者に語っている。これがもし、農協など野菜関係者の方々が多忙のため余力がないのか、日々の作業に忙殺されていて、折角の指南書を手にとる暇さええないような状況であるとしたら、それこそまさに宝の持ち腐れのような話で、そこは何をおいても、二三日仕事が遅れるようなことがあっても、本書を手にとつて、沈黙黙考を重ねてほしい。そのためには是非とも座右に置くことをお奨めしたい。

ところで、このようにして全道各地で築きあげられてきた「主産地」のかなり多くの部分が、その現状ならびに今後の方向という観点から点検すると、共通の深刻な難問に直面していることに気が付く。その第一は連作障害をはじめとする土壌劣化の問題であり、その第二は後継者難をはじめとする労働力不足の問題である。この二つの問題は相互に密接に関連しているが、売り上げ何億を誇る有力産地の内実がこうなっているというのは、全くゾッとするような話である。

野菜という点、十年も二〇年も、同じ圃場で、同じ作物を作り続けるのが常識のようになってきているが、それは単一の品目の産地形成、産地継続の場合であって、すべては連作障害を未然に防ごう、発生しても軽微になるように制御しよう、ということに尽きる。客土をしたり、施肥を改善したり、その努力は多岐にわたるが、所詮は連作障害の壁に突き当たる。そして、そこから途が分かれる。一つは従来通りの、単一品目の産地で限界まで続けるか、それとも、従来の単一品目に加えて、これを補完、是正、緩和する第二・第三の品目を加味して、複合産地の方向をとるか、ということになる。後者が、いわゆるクリーン農業とか、環境にやさしい農業といった形で、活路を拓きつつあることは周知の通り。したがって、野菜生産だから、連作障害が不可避であるように考えるのは早計だろう。前述の六つの頂点を巡り巡って展開していく時の、一つの局面というべきである。

しかし二番目の、後継者不足、労働力不足という問題は極め

て深刻である。それもただ単なる季節的な労働力不足なら、パートタイムの労働力や、研修生の労力確保である程度の対応が可能だが、担い手がいなくなつては、肝腎の経営を阻害し、動きがつかなくなるのは目に見えている。

だが、よく考えてほしい。いまピークを迎えている主産地が形成され始めた二〇年前、三〇年前には、元氣な青年部、女性部の面々が、力を合わせて活躍していた。彼らは、高収益を目指して、自分のため、地域のために日夜健闘した。問題は、その下の後輩の人達をどのように位置づけ、どのように育てようと考えたのか。そのための手だてを、どのように工夫したのか。そこがスッポリ抜け落ちているのだ。

若者たちは、楽しい野菜づくりを展開したいと考えているに違いない。ただ単なる所得の高さ、収益の高さだけではなくて、太いに楽しめて、人々から期待され、あてにされることを願っているに違いない。要するに、前述の六つの頂点のうち①と⑤を想起してほしい。決して手遅れということのないように。

編集 北海道野菜史研究会
 体裁 A4判 616頁 レザック表紙
 定価 本体4,500円+税(送料実費)
 刊行 北海道野菜史研究会・刊行会
 (公財)北農会 内
 TEL&FAX 011-251-3325
 e-mail: hokunou@vega.ocn.ne.jp
 発行 (株)北海道協同組合通信社
 申込み TEL 011-209-1003 (管理)
 FAX 011-271-5515
 e-mail: kanri@dairyman.co.jp